

夕刊 東北日日新聞

本紙は毎月二十日発行... 印刷所 仙台市...

警新排撃について

敢て天下に聲明す

泣いて同志を斬るの此の心情

私事の爲めに公事を曲げ得ず

東北日日新聞社

同業先輩として常に敬意を籠の如き極わい極せつての文... 吾社が警新排撃の筆を染めし第一の理由即ち之である

して且つ大なる責務を持つ... 吾社が警新排撃の筆を染めし第一の理由即ち之である

人騒がせだつた

白銀強盗事件

泰山鳴動して鼠一匹も出ず

口あんぐりの平署

平野白銀町阿部憲次方の覆が入つたと言ひば夜の外出... 吾社の排撃に對してかすかに悲鳴をもらした八日夕刊

湯本町民大弱り

水道の敷設は刻下の急務

町民が寄々協議中

湯本町に於ける飲料水の欠乏は午後三時四十分頃全家の精... 町民が寄々協議中

社告

本社が湯本町に左の如く編輯支局と本紙専賣所とを設けましたから社告致します

木炭の等級

第三郡木炭同業組合では木炭の品質改良を爲る爲めに四月一日から生産木炭の等級検査施行することとなつた

各種団体

平警察署の移轉決定と同時に石城郡各種団体では団体の

精米屋の

石城郡川部村生れ當時泉村大字瀧尻精米業佐藤金慶方

漸く落付いた... 各種団体... 精米屋の... 木炭の等級... 社告



大河内傳次郎 伏見直江 主演
大岡政談會 平館上映中

煙の中に描く(六) 四倉町 夢生
彼はソ上の魚に等しかつた
彼自身の存在が全然無力で
あることを認識して悲しく
なつた。
「ウム」と検事は言ひなが
ら聴取書に筆を走らしてゐ
た。
彼は検事の一字々々を書く
眼で追つてゐた。
「私はその時鳥打帽子を被
つてゐました」
聴取書の内にこの文句を發
見した彼は叫んだ
「検事殿私は鳥打帽子を被
つたとは申しません」
「失禮々々うつかかりして
たので間違つたのだ悪く
思はないで呉れ」
検事はその文句を抹殺して
しまつた。彼は救はれたか
のやうにホツとした。彼等
が惱まされた偽証の罪、そ
れが間もなく起訴猶豫にな

つたことが判明した。
バットの煙は彼の眼の前に
渦巻いて流れた。彼の妄想
は煙の如く變轉していつた
煙草好きな人、スターを吸
ふ検事の心理状態には興味
が湧いた。彼は彼希望の總
てを煙に溶してゐるやうな
感じがした。戀愛! それも
煙に投込んでしまつた。彼
は考へた。彼の一切は煙の
中に描かれてゐた。煙! 煙!
! 室に漂ふ紫煙に彼は彼の
將來を夢みてゐたのであつ
た。(終)
若き歌人へ
若き歌人の希望によつて
設けた本紙の日曜歌壇:
それは全く有意義なこと
、思ふのであります
明日は歌壇日であります
何卒ごしん、御投稿あら
ん事を……
東日歌壇係

▲通人食堂▼
煮込みおでん
江戸茶めし酒
御上
梅月
これぞ本當の江戸ツ子おでん
常磐銀行階向の小さな店です
衛生、便利、採光、通風上より講究した最も
幸福な家相鑑定と測量、製圖の需に應ず
平町白銀町
石島陰陽館
電話六五〇番

産婆 生徒募集
申込期日・四月八日(無試験)
夜學寄宿舎あり
資格……高等卒業以上
平南町
私立平産婆看護婦學校
校長 清野キヨ
電話三〇七番
俺が服見よ、自慢ぢやないが
買はぬ者ない、正札堂
アラ 正札堂
物は試しよ、正札堂へ
来てよ、おさんせ、服買ひに
アラ 服買ひに
薄利多賣は此の店の主義
不景氣泣かせの、福の神
アラ 福の神
正札堂
平・四丁目停車場通り

祝刊創
平稅務署長 岡部 掬
祝刊創
磐城共濟病院
イヌミテーブルの御用命は
本箱とツクエ
丸ほん
三丁目・電三五九
月見町工場・電七二三
開店披露
自動車御用ハ
電話二四三番
平驛前 昭和タクシー
澤 正路
親切で勉強の……
…… 叶屋雜貨店
御婦人御くしあげ
御婚禮お仕度を致します
湯本町上町
大井川喜代
ごんな重症でも
のめば直ぐキク
◎慢性淋病藥
特製
リベール
一圓 二圓 三圓 五圓
四丁目 小野藥店
電話一四四番

祝刊創
平稅務署長 岡部 掬
祝刊創
磐城共濟病院
イヌミテーブルの御用命は
本箱とツクエ
丸ほん
三丁目・電三五九
月見町工場・電七二三
開店披露
自動車御用ハ
電話二四三番
平驛前 昭和タクシー
澤 正路
親切で勉強の……
…… 叶屋雜貨店
御婦人御くしあげ
御婚禮お仕度を致します
湯本町上町
大井川喜代
ごんな重症でも
のめば直ぐキク
◎慢性淋病藥
特製
リベール
一圓 二圓 三圓 五圓
四丁目 小野藥店
電話一四四番